



岷江入楚

卷之十一

特別
4604
20



43
12
4604
20



し女

廿二歳

諱園

任太政大臣

小汀文庫

四月一日更衣改服高服也

權存院除服也 源氏訪行也

大殿若君御元服也 又芳右将也

六位還殿上

冠者若竹字也 於東院有也

入学也

寮試也

又人檢生也

梅堂女御立后也

源氏立后連續也

源氏日右政大臣也

大将任内大臣也

冠者若君内大臣日若殿也 此は余也

内大臣及後娘若君也 延喜式也

至國云母ハ梅堂使大納言也のナカ

也兵房也

世中々ありしもの衣うへのり

深服より深服と服をわきゆるをいふ

又ト皆深服の服をわきゆるをいふ

あしあき

ましてまつり乃比ハ 賀茂系

大ののや乃をいふ

且月天氣和又清といふ

且月天氣和の天氣といふ

弄餘園乃後世中の人乃ト云らるるなり

弄餘園乃後世中の人乃ト云らるるなり

弄餘の比後世中の人乃ト云らるるなり

弄餘の比後世中の人乃ト云らるるなり

弄餘の比後世中の人乃ト云らるるなり

弄餘の比後世中の人乃ト云らるるなり

弄餘の比後世中の人乃ト云らるるなり

弄餘の比後世中の人乃ト云らるるなり

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

私又の初をいふ

せけて降服のいふは後等とてつけりしとし
或又の玩は降服の事とて今年も去年も
いふはあはれはひきかへしはひきかへし
くめしはひきかへしはひきかへし
やとあそびしは降服とてみても
くはひきかへしとあるは降服とてみても

私北抗降服をりつたの花を下の葉と月
かゝの葉とて日降服の事とて
は去年の冬もくはひきかへしはひきかへし
つたはあはれはひきかへしはひきかへし
のうらまはしはひきかへしはひきかへし

ひらひらとてはひきかへしはひきかへし
世の紙よりあはれはひきかへしはひきかへし
あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし
あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

あはれの花はひきかへしはひきかへし

源興基 源正尹人康親王男 貞觀八年二月七日叙後四位下七位

源博雅 共々克明親王男 養平四年二月七日叙後四位下七位

親王子直叙四位雖為流例一世源氏大臣息大略叙爵於源

叶信大長子同靜 光長子 伊序 兼明親王子 兼賢 高明大臣子

皆是叙後五位下者一兼光于時大臣七如何因茲位

よる一兼光 兼光有朝服元

或出流位一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

乃道よ入を一兼光 兼光朝服少くは後位一兼光 兼光一兼光

此たいりやありき 紅 大文原の對面ありき
これゆりきこし後より

六位少らざるをきりふんゆりぬ 紅 大文原のありき
をいひつゝしきましり

可加倍と高くなる一て人よ進つてまゝいふ弟に親り玩
或況云老つていふまゝゆりゆりあつていふまゝいふまゝ
私昇進に人の進つていふまゝいふまゝいふまゝ

大 紅 ぐのみらよとていふまゝいふまゝいふまゝ
西三條右大臣良相と因況左大臣冬嗣の子に大臣良大

尚書大傳曰古帝王必立大学小学使之知太子大史之
元子士之適士十有三年始入小学且十節孝踐士義孝
年十有五入大学見大学序序序大義孝入小学名又子道
長幼之序入大学名君臣之義上下之儀
實録曰大臣在童雅局量用明及於弱冠始学大学

雅有才也

論語曰三年学不至於穀不可得而已

貞觀格云大学者為文之處養賢之地也天下之俊咸
未海内之英並萃游夏之徒元非云相之子楊馬之
出自寒素之門高才未必貴種 紅 未必貴才且史王者
人々是貴朝居所養才之堂也

礼学託玉不琢不成器人玉学不知通之故古之王者
建國君氏教学為先 紅 雖有嘉肴弗食不知其
味雖有至道弗学不知其善

大学鄭氏注云大学者以記其博字可以為政也
坐相八子息大学の前より入り良相之後賢つ木の例あり
或曰況藤氏勸学院臣氏學学院極氏學学院

いひ二三年を
いひいひ二三年を

學云乃進つていふまゝいふまゝいふまゝ

しつゝきんこれのしらよ 源の月結し
しつゝきん 相女とれはあせ
しつゝきん ちつてんはしつゝ

※ 延政の帝 ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

又さし 弄文が 中文のさし

かきつゝきん ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

子紅の ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

物もあれど 又見賜於師 減師半法 じつてんはしつゝ 又子の
道きんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

私原の ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

しつゝきん ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

たつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

ちつてんはしつゝ (しつゝきん) ちつてんはしつゝ

みゆきゆきよふじのくくするまにふよ人の道はせむ
にまをれくのもくちれくふのくくしてあらあら
れくちああらくんとまを

まをれくくして 身は僕もまを

わくくくくくくく 和国魂 和入魂

わくくくくくくく

くくくくくく

南村くくくくくく 叙爵くくくくくく

ふのゆくくくくくく 後ま

ふのゆくくくくくく

はくくくくくく

くくくくくく 改道神化の賢人の長ふくくく

ゆくくくくくく 後ま

はくくくくくく 後ま

はくくくくくく

くくくくくく

窮者 日薄くくくく

くくくくくく

くくくくくく 隙月の口下の精よ

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

これかゝるものから 文章の中心とをさすのめり
右将左出の勢のさすもの

秘 厚東の著にちねと不殿の兄弟

系圖の母藤太の春まゝ二人の内げ厚東の著
あさぶをいふこと

此後のゆりし大文の四句

しらけいぬいぬ 秘 厚

つとをすけり 秘 厚の詞

をらすけり 秘 厚の詞 秘 厚の詞

の強 秘 厚の詞 秘 厚の詞

あ 秘 厚の詞 秘 厚の詞

う 秘 厚の詞 秘 厚の詞

厚の詞 秘 厚の詞 秘 厚の詞

あ 秘 厚の詞 秘 厚の詞

秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

い 秘 字入儒者 秘 文章院 秘 堂監

わつ〜〜〜

わつ〜〜〜
河博士臆

わつ〜〜〜

わつ〜〜〜

わつ〜〜〜

わつ〜〜〜

わつ〜〜〜

臆〜〜〜

家〜〜〜

窮〜〜〜

私儒者〜〜〜

わつ〜〜〜

人よかり〜〜〜

他下〜〜〜

の絶の肩の破綻

或況
洗務不厭死
儒者多誤身

任務地流〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

石をねらうるを此をまろくけりしけりぬし

弄 形んくろなるし
わかれくかろなく日廻し伊勢物成りま

のやかほましくも移むらろのんこしう移らぬ

いとみし伊勢物成り福平の声よあまろくとま

字に陽る声をとさしけ物成りをろくいとあまろく

のんあまろくみしうをらろくしうしうしうしう

とあつしはこめまとい貴航の志剛よ歌とすま

色成る伊えろろを益をのこくもろく巡流と秋の流

をこまろくを移すとれいこまろくこまろくこまろく

弄 別よまろくまろく 何ノ事果

早下の田垣下のさんしうしうしうしうしうしう

人数の年の人ろろしうしうしうしうしうしう

こまろく食しうしうしうしうしうしうしうしう

こまろく食しうしうしうしうしうしうしうしう

とよまろく

和 昔十ヶ条し一七かりといの字に我刃をらろ

早下しうしうしうしうしうしうしうしう

るまろく垣下れるしうしうしうしうしうしう

こまろく人数の年ろろしうしうしうしうしう

将るまろくまろくまろくまろくまろくまろく

いしうしうしうしうしうしうしうしうしう

お 大学の流の細しるまろくまろくまろくまろく

弄 大学の流の細し一儀しうしうしうしうしう

御るまろくしうしうしうしうしうしうしう

あまろくしうしうしうしうしうしうしう

まろくしうしうしうしうしうしうしう

一帯しうしうしうしうしうしうしうしう

大かけしうしうしうしうしうしうしうしう

ほつろ鳴平かこりり
儒者としてこの世の我々と早下〜
花かこいれ〜花の美とこれと小りり〜
ぬふに伸くたか〜か〜

人〜か〜か〜
花〜か〜か〜
又〜か〜か〜
か〜か〜か〜

乃〜か〜か〜
え〜か〜か〜
西〜か〜か〜
常〜か〜か〜

弄
河海は風俗高或考乃河海といふなり
高唱何文〜
心わ利

或武臣云飛高若目用〜
儒者乃由〜
私〜

はをひ〜

秘
は〜

何〜
見〜

大〜

此〜

〜
〜

叔はるまはるはる

其れは叔あまのし原のたういひのよひは我れ

まらあまのまらあまのまらあまのまらあまの

うらまらうら 初 原の仁恕あまのまらあまの

とよゆらゆら 別 まらあまのまらあまの

まらあまのまらあまのまらあまのまらあまの

叔人 三 秀文をよみし 五 弄さいとん 一 功

私ゆらまらあまのまらあまのまらあまの

らあまの人の詩文はくはるん

まらあまのまらあまのまらあまのまらあまの

私回韻八八句の詩 絶句

何花本被人名 以名爲韻 中書王 具平親王

年齢稍遠感詩情 被誘鄒牧一旬城 桃李之外忘花若

應笑久極風月賞 江以言

春天花木富芳深

何知未羨霞卷色

白同唐帝專房且

莫恨翰林零落士

けらあまのまらあまのまらあまのまらあまの

翰林の人乃出題すまら 韻の字ハ切韻とて何字とて

韻とてまらあまのまらあまのまらあまの

文字の中平声乃字をまらあまのまらあまの

又何韻あまのまらあまのまらあまの

みらあまのまらあまのまらあまのまらあまの

私回月乃束るれを也

反中予くくくくくくくくくくく

系圖乃系の人ハ文章生くくくくくくくくくくく

かあまのまらあまのまらあまのまらあまの

石中弁のゆめとつづほろり
 かろたつるさかじむされはるくせうのえいごよいの
 夕暮のまゆ

油のりともじつひ枝の香とより後私な
 車胤後唐の虫食ひてゆきつゆよ
 淳は其の四子せういの葉花またふれはるつ
 ともけしめ子回しあふあつたさ
 堂の對しつづ初し灯を九枝といつふ
 為つてはひつ本の枝よあはれ

行晋車胤字武子河東人好讀書無油夏月
 囊盛數十萤火照書讀至吏部尚書
 孫康家貧無油常映雪讀書後至御史大夫
 九枝上七より雪う灯檝夕しに玉瓊
 九色情長九丈九色華高ニ丈千枝灯高
 尺平御覽牙八百七十鄴中記石虎正
 百二十枝灯以鐵為之西京雜記日高祖初

宮周行府庫金玉珍室不可稱言其
 枝灯高七尺五寸梁王筠燈詩日百花
 會賦華灯燭百枝之煌々是等皆灯
 私灯の枝上云ゆ河内魏方々花鳥ノ

死
 私原の何れももたられなつて人を
 らのりゝらぬや
 女の子乃地

今日凡學生在学各以長幼為序初
 礼於其師各布一端 英武之凡
 學不限年多其想加簡試其有
 徒情願入

但諸王五位已上、子孫不煩二間試一

東脩の礼、論語述而篇にも自行東脩一上吾未嘗

無誨焉一 花をもよ令の文をせしむ

寛平八年十二月十二日、祿世親王入學、當日早朝、臣

章博士、記長谷雄卿、自持名簿、賜之長谷雄、拜舞

親王茶堂

^儒二世源氏歷儒業例儒

源伊行後曰後上西ノ本東宮子ト兼明親王男花山院侍讀 同後賢正二位大納言西宮ノ左大臣忠明男

後賢二例一を叶一今例一也

又執政二歷儒官例一

崇仁二天長五年同二月甲午任大宰一時後五位下

わろけ院の一り一

二条院一の曹司一つ一り一る一子一の一あ一り一

又章院一申一有東曹司一模比一

私一之一院一二条院一也一入學一の一例一也一

も花一の一里一の一り一る一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

手 楽院一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

手 山一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

大文の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

手 山一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

手 山一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

手 山一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

一月一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

大文の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

手 山一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

手 山一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

手 山一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

手 山一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

手 山一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

手 山一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

手 山一の一り一る一里一の一事一と一源一の一事一と一を一比一せ一り一

ヨシイツキ 秘史

弄 ころろの月とらむし

史記年しふふ

史記 馬廷裴駟集解 本紀十二卷表十卷志八卷

世家廿卷列傳七十卷都台百廿卷 校為八卷

西京雜記云司馬廷發憤作史記一百三十卷 カハ十二卷

金樓子曰正仲任言又况一經者為儒者七傳古今者為

通人之上書奏事者為文人能精思等文連篇章

為鴻儒也若列子政楊子雲之列是也蓋儒生轉為通人

特為文人今業文人撤生ハ撤文章生トテ文章生ハ撤

スルハ或撤進士ト云

大學寮にりり試し大學寮より史記とらむし

て班儀を問う儒士とらむし

弄 抄り

寮試 宗祇回一巻字と興

とハ寮試にけり

と大學寮より試と寮試と云試は史記とらむし

撤文章生と文章地業生曰小中三書大學子寮より

りめりり学心とらむし

業生といふ又昔の諸回より文人を年貢にせむ

ありそれと貢とせむとて

撤文章生と文章地業生といふ

九儒業をつとむし人の次第とらむし

灯姓科をけり九年の召量のつとめとらむし

て後大學寮にりり試と史記とらむし

小ぬ業の申ふと業も通とらむし

生に神とらむし又撤掃七年とらむし

年とらむし月とらむし七年の同子といふ

策れ文といふのゆゑに

策の文といふ儒業の一とらむし

同者の儒とらむし

引ては頭の中を對句にさすも其意をさすて厭事
人一人又對句のさすて其意を引てさすも其意の

又平明又粹乃亦之美よりこれと括るるなり
花又況昔はは秀力進士の二科あり秀力と方略と

手法方略は秀力のさすて其意を引てさすも其意の
秀力と方略とのさすて其意を引てさすも其意の

花又況方略は秀力のさすて其意を引てさすも其意の
秀力と方略とのさすて其意を引てさすも其意の

手法方略は秀力のさすて其意を引てさすも其意の
秀力と方略とのさすて其意を引てさすも其意の

花又況方略は秀力のさすて其意を引てさすも其意の
秀力と方略とのさすて其意を引てさすも其意の

手法方略は秀力のさすて其意を引てさすも其意の
秀力と方略とのさすて其意を引てさすも其意の

三番

昔ハ時勢といひて其時の改るるをいふなり
の宣言とかりてて献策の文より其意を引てさすも其意の

花又況と乃せよ又其意を引てさすも其意の
其意を引てさすも其意の

手法方略は秀力のさすて其意を引てさすも其意の
秀力と方略とのさすて其意を引てさすも其意の

花又況又入学のれ乃は其意を引てさすも其意の
其意を引てさすも其意の

手法神も教人なり其意を引てさすも其意の
其意を引てさすも其意の

式品から其意を引てさすも其意の
其意を引てさすも其意の

ありを士ハ時勢策とて其意を引てさすも其意の
其意を引てさすも其意の

手法し年なるなり
其意を引てさすも其意の

まいのちね 夕暮方のそらちねい

ほのぼのしくゆくゆくのこころ

丘ちすくアと情左中弁 ^秘 二人系圖よみしり

らうせれくさあつ

たぐいからんさあ

論語云言可而復 信覆猶復書也 ^秘 覆勅

因ふさあをくくし不復とさあ

ういよあつ

又段のうよ流通しりんる

或うくす説しり又うく説しりか

音し詞とれ ^秘 私け不不富

は ^秘 のこ

つま ^秘 の ^秘 ち ^秘 ね ^秘 此 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

せ ^秘 なる ^秘 九 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

然 ^秘 して ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

一 ^秘 説 ^秘 云 ^秘 角 ^秘 弁 ^秘 なる ^秘 九 ^秘 角 ^秘 弁 ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

言 ^秘 の ^秘 角 ^秘 弁 ^秘 なる ^秘 九 ^秘 角 ^秘 弁 ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

又 ^秘 なる ^秘 九 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

信 ^秘 なる ^秘 九 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

あ ^秘 なる ^秘 九 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

不 ^秘 富 ^秘 の ^秘 角 ^秘 弁 ^秘 なる ^秘 九 ^秘 角 ^秘 弁 ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

の ^秘 こ ^秘 ら ^秘 ず ^秘 や ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

は ^秘 なる ^秘 九 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

け ^秘 人 ^秘 の ^秘 大 ^秘 子 ^秘 の ^秘 信 ^秘 なる ^秘 九 ^秘 角 ^秘 弁 ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

ち ^秘 ね ^秘 なる ^秘 九 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

を ^秘 ら ^秘 の ^秘 大 ^秘 子 ^秘 の ^秘 信 ^秘 なる ^秘 九 ^秘 角 ^秘 弁 ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

人 ^秘 の ^秘 こ ^秘 ら ^秘 ず ^秘 や ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

人 ^秘 の ^秘 こ ^秘 ら ^秘 ず ^秘 や ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

子 ^秘 の ^秘 こ ^秘 ら ^秘 ず ^秘 や ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

死 ^秘 子 ^秘 の ^秘 こ ^秘 ら ^秘 ず ^秘 や ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

子 ^秘 の ^秘 こ ^秘 ら ^秘 ず ^秘 や ^秘 とい ^秘 信 ^秘 なる ^秘 とい ^秘 合 ^秘 説 ^秘

みいほくも又あつてせしむ

秘副止とくしよるし

そくしそくせにけりてくはつ

夕名方のりすまのしつこく此作法も腹どぬし

大づくのうらゆらひりれい

思と原の山奥りり夕名れ入字刀丁わさうく我れ

とあつらひり人あしとくしうろと上中下し

秘原氏の将学校藤氏も勸学校極氏の学校院と

てつりゆらそくも学心とてゆらつてんみしり

とんけんしゆし 何文人擧生

何金様十日 廿中端裁

今葉丈人の文章生さけり擧又をき生さく又き生さ

擧とくし式擧進士

史託丘條乃中よと条はとよ通すも擧又をき生に補さ

進士乃才の花名にけりてくさくち殿をわけくつ

二方略の堂旨をりある人の文章生進士と

より進とて擧文章生といふし又人いふといふし

夕名ハ擧又をきといふ後行奇の対面乃試ありし

因東城ヲ所前ノ詩トあつて王荆公カ文を

アリト云々ゆつてる

夕名れはくしりてくさくのゆらとてぬれぬれ

又いふぬら師のたゆ託夕名方とよよはよはよは

殿とあははけりしけり

原よりぬれぬ又アハナリ

けりてさし人ともあつてり

原乃多々申のほらぬ

とつてあつてり

もいふゆのゆらゆらとて後道のゆらゆら原の擧れ

の長ゆら何ゆらと再奥あつてり

大長中国白道隆之永祿元年二月廿三日内大臣二年五
月内大臣内大臣 傳國之 正曆五年八月廿四日内大臣長祿元年三
月八日内覽

人しつとすくまに 秘世下ちおのりしとてり
おんあつとにまけけりしと 秘林巻よわり
秘掩顔まきしけのりしと 秘林巻よわりしと
おんやけけりしと
秘有徳のりしと

ろろくよれ子ととと十人
私云系圖にれすよ十一人
かとすはく人あり

秘原よおしとととと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと

秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと

秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと

秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと

秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと

秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと

秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと

秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと
秘世下ちおのりしと

女御の父おとけおききとがらふいせ井もすくれいふと
火事の末ひらふ所 ワ音

或五位を置く人と冠者ト云ト云

をのくすまなかりりてのらしむりくしはあすし ワ音

どのちまふらとくすしき

秘ワ音ハ十二才き井居ハ十四才

わおと き井乃父たは

おとれんらり ワ音乃ん

糸まやた 父おとせとをくといわせといふ所をたのつと

こらういふ

いふらぬらういふ

ワ音井乃居のあふのり ワ音

まうくまらわてい

秘学問を そまはなあま

ふいきと りわて

かいはいなりて 二人乃

こらう てま

秘こらう た

秘右政大臣 并 内大臣乃大炊

秘右政大臣内大臣新任養多 五年

相母屋の養多 と

萩の う

秘林 た

ま ら

い ら

秘 由

秘 由

秘 由

秘 由

秘 由

こけりたるの親重くれの原氏をそそりあに比巴の上
ゆをふりしけり初こころくと云詞をよやくやとせら
とがくもろしあやうりる教へ

おれいおれいの山とよ

秘 ぬるよ

秘 ち改ち改をいりこれおりの入らる

秘 物りよそののらまのゆきと

秘 ゆ右入右延右の時より三代とらるる

秘 ちちよのふもいり引つえらうまよ

秘 かのおとといとんよ

秘 ぬ右との色を原らああよと

秘 ちといり物よあせ

秘 合奏をせ下いとあ

秘 ぬ右と山ううりいとらとよにせられらる

秘 ちりと内をたのりよ

あよりろり ちえへ比巴を而せ

秘 ちりゆとと 秘 左のふりてをきりてり

秘 柱や比巴とけいらと云華とけい柱トワと

秘 柱内とををりて

秘 さいといほりらて 美 校仕修政 書目

秘 ちえの河ぬ右とのさいといくらをいり

秘 ちりもててや

秘 ぬ右非ををりてのさいにえらるる

秘 ちえとへゆられちんをてちをりちり

秘 女いんをせりり

秘 内大臣 書目

秘 女脚をけいりて

秘 ちりぬんよ 秘 弘徹を

秘 秋好まをいれらると速懐をりり

秘 この意をいよ 秘 ちり井乃馬

秘 ちえの元服

後 東隆院の字は今日とトヤ
公卿いふを

そ井原を弟と申すせんとうやく

そりよまふ井原のりてまきさつらひ

そ名姓意のこころに實之物のまじ

そ名中まひいさきとを

そ名中まひいさきとを

そ名中まひいさきとを

そいすういわれ

そいすういわれ

そいすういわれ

そいすういわれ

そいすういわれ

そいすういわれ

そいすういわれ

そいすういわれ

細 ちまひ

この家よりさるる人

細 志仁公兼春系氏にゆゑとらるれと云ふと云ふ人

てとるすういわれ

細 志仁公の母をいさきと云ふ

女洲のあとも

弘徽入内りをもも祖父波仁格政のわらうと云ふ人

そいすういわれ

かくいすういわれ

お格政おとすは弘徽殿の立后に理直なる人

よここゝなちるすういわれ

そいすういわれ

細 志仁公の母をいさきと云ふ

細 志仁公の母をいさきと云ふ

いぬのあとも

いぬのあとも

いぬのあとも

下場 ありあり

本よりいりといわわあわ威を只下ん

こりゆのてつこ、ら 第ノ取由こ

まもるよりあうりゆと

ちまのちまの居をらうこむむらんこ

おとこえんひいせ

内ちたあ時の和琴の上もとここ四

アとのののの

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

文選四十六六位注 陸士衡豪士賦序 落葉侯微風以隕

之力蓋寡孟嘗遭三雍門而泣琴之威未何者欲隕

之葉無亦假烈風將隕之位不足繁哀卿音李善

注引桓子新論雍門周琴事

注引桓子新論雍門周琴事

ふんの勢あうぬとわりて 雍門周の琴を弾てま

ら大に和琴をいひわらぬま琴はあうぬとわり

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

おまらりており何小調子へ 并日

同光也

何事なくしては白と漏しぬるるへし／＼に末の句を
引合て足ゆゑの味ありきなり 以上
或の流高漢士賦——思く 雍門固益膏肓と云はれ
て云益膏肓天下に居る人よりた未だはれ風をまらさし
少じやなくやむはみかりし／＼をどつ塚上にのりりて益膏
肓の膏貴すくれくのこころしついでに／＼をるる事と云を
ゆて／＼は益膏肓をよめる人のりきや、雍門固益を
まゝく人のみ後をさし／＼益膏肓をさしてまればあつと云
きと／＼を又雍門固さしてまればあつとありせしむるといふ
益膏肓者の所かいては乃ち花鳥の影のこころりりや益膏
肓のりりく／＼んれのをさかするふく時眼は淚う／＼く時
琴を雍門固りくけし一曲を／＼／＼と／＼とを
私け法乃合せや／＼／＼／＼／＼／＼／＼

秋風おとくし何事

秋風手盤少酒律へ 并同

秋風のりり／＼をさして／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

まのりり／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

ち又のそ井の馬をらり／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼
り／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼
いと／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

のりり／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼
み木下／＼／＼／＼／＼

燈巻のお子／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼
おさ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

おさ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

おさ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

おさ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

くねてききしりよやあんと

つよよ海にすし子のごころも何しよそのゆふ夕暮ふん

さるにせりよに定て子細まへし

ふのねもあるとい
白子期思回賦序曰隣人有吹笛者發志寒亮ト追想
最昔遊讎之好 文選六注住才十六

おとこくししきりくくししきり
おしりき柏子よわけて捨兩をくしめをふん

ゆきんししきりけしきりくはしきり 柏子
菊二子と柏子にいでらんもくしめをふん遊をあ

時ふかきくあつ人の命をこりて我命とをすけらす
るわり後江のたま乃ふあへ年りすよふいしせんく

とのおすくかりりしきり 菊乃 月念に及へしきり
時し扇を打たしきりしきりしきりしきりしきり

下りるや

私ら、はししきりしきりしきりしきりしきり

秋の夜すわかと 白子 更衣 催馬赤呂

催馬赤呂更衣衣くさんしきりしきり 野 野のつれなき

衣も乃流をきりしきり
今兼冠若の衣あはれりあをけしきりしきり

衣も乃流をきりしきり 衣 衣人の命をきりしきり
大ねし

石ちねの衣江の表しきりしきりしきり
衣も乃流をきりしきりしきりしきり

私大ねの衣衣のるしきりしきりしきりしきり
衣も乃流をきりしきりしきりしきり

いさき 白子 井

いさき 白子 井

いさき 白子 井

あまのこころのこころ

言わぬ馬鹿なりをとりしりしつて

火に赤きおのりしりしつて

くさきまじり内府をク音にこりまじりて^後りりしつて

とりしりしつてやまりしつてはりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

若ししつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

ゆつりしつてしりしつて

通りをよめとや音をたてしめゆはまゝもふを
なふちんとんこのつしちりしりのまへにまを
ゆゑしとちりたりりりしゆめりしゆめかかひらけ
まよりのまよるまわらばまゆつ子のゆくるれば
彼心ねやまうん

せうしやう 何雄抜 日本記 鞍

私云あぢやぐさの解の字にる(うん)地のもく(ま)おもやめ
まろりくくけんこでして思(き)ひ(こ)し
或かとけりてあつるまゆめしけし火急がんでい流
にとてにけし思(き)ひ(こ)しけし
二日たりあつてまりたり
たまふいりりは内た居のありしる
らうりまふりりあつて

^私おふふりりりあつてたまたまいりりいり
おあーびと 何屋額 つけたの
まわらまゆ

^并まをとしはれまありつとまわらうからとり
いち田(田)をとしばかのまをまゆけり

あにまゆ 何内た居の詞
よ〜おもものしり
^私たまふはたまふまゆまゆいりりいりいり
がもまゆ 何

とこいれと貪著をまゆし人のうんと服ま〜て
りしけやりあつてまゆまゆ
まけら〜しりりあつておのまゆまゆ
たまの引けくりりりりあつておのまゆまゆ
おゆまゆとおいとあつてまゆまゆ
いやいあまゆ 何 たまの詞
おまゆ 何 細おまゆ

わしにいつと聞かされど

たまの思ひをこすりいと聞かむと田舎の心なり

たのりたけは 心 田舎に親

おこちまの地を

心 いれをこけつけしをまわし

うらうら

孫向田府へ言お居れうらうら

まけをらうらうらうらうらうらうらうらうら

こまに殿のうら

ありとも人とらませ

言お居れをこけつけしをまわし

わしにいつと聞かされど

心 田舎の思ひを

心 天下の思ひの有識や 孫向田府をわしに

私をこけつけしをまわし

うらうら

夕音君田舎の母をこけつけしをまわし

孫向田府へ言お居れうらうら

わしにいつと聞かされど

田舎の思ひを

夕音君をわしに

うらうら

わしにいつと聞かされど

孫向田府へ言お居れうらうら

わしにいつと聞かされど

田舎の思ひを

夕音君をわしに

うらうら

おどろきしんをのらふ由せてあらんしんをらける奴
重なり音のましませとせぬ振とたまわりの
お曲もあまふとつらうをわぬせりきりありあ
しとあまわりしり

わたりもろわねね たま

けふののゆふとことわ たま

わたいとくらがし たま

おれこそおれと たま

りりとせにつこをわぬせ

二人のふと たま

ふと たま

み たま

け たま

おとよと たま

う たま

内府おどろきしんをのらふ由せてあらんしんをらける奴
おけたふふを たま

お たま

け たま

た たま

ふ たま

これ たま

ふ たま

唐 たま

ま たま

お たま

お たま

お たま

お たま

お たま

お たま

お たま

何れうまかたのりしり 秘田舎日記

不意なるものにていなり 官院をわよのり

さふらう人くも 一日乃ちりうことをあり

くらわくやをがらをうらめしうやとくまのいぬ
内府持憤敷せらるるあり

かし 徳らんを はしりくをわらう人くれば

一長式三りうごと ちりうごものくはらうておそはれくとも

いぬ若い何れをかく ぬいぬんよすおがらんをうす

雲井原のくく 田舎日記すし

わりき人といひたり 秘田舎日記

かたさる 雲井原をさしとく

これより海をうけんかきわかれ

我子の心おさるを うぬ我がけらるる死と

さいちむ さいちむに飛ぶあめのとをよとりののり

くくわたりたみと くくわたりたみとめ

醍醐皇女康子由親 皇女村上帝の御時弘徹より

五相敬贖子罪陽石 活公孫鉄 僕春

康子由親 皇女村上帝の御時弘徹より

又何とより 又何とより

これいれ これいれ

まのわしやあゝふとせしめしう

たまのお分別りしりもさうしてつやうにうらなひと
つらまじりつらなをさうしてつとつと

あつてしつとつと

けしあめりともさうなさいあつてしつとつと

まうさんともさうあつて

これ世との人のさうさう

ゆりしめられさうあつてしつとつと

是はつとつとつと

をのつとつと

ゆりしめられさうあつてしつとつと

うしつとつと

ゆりしめられ

松この権新ゆりしめられの性ちも急なもんたつと

あつてしつとつと

ゆりしめられさうあつてしつとつと

ゆりしめられさうあつてしつとつと

まのわしやあゝ

ゆりしめられさうあつてしつとつと

あつてしつとつと

ゆりしめられさうあつてしつとつと

あつてしつとつと

あつてしつとつと

ゆりしめられさうあつてしつとつと

あつてしつとつと

ゆりしめられさうあつてしつとつと

あつてしつとつと

ゆりしめられさうあつてしつとつと

あつてしつとつと

あつてしつとつと

ゆりしめられさうあつてしつとつと

あつてしつとつと

いらいして、いらいして

これゆへははねをとりて、こゝろをねて、いかにいかに

ありて、いかに、いかに、いかに、いかに

内府のりねと、いかに、いかに、いかに、いかに

まいに、いかに、いかに、いかに、いかに

大まは、いかに、いかに、いかに、いかに

中も、いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

いかに、いかに、いかに、いかに

くわゆるらんをもとて 火出の京
ゆたにの版立のよと夕音のよとね

一夜せんめーけい

一日内大信と春のあひのこ

夕音とあひのこ

あまのこあひのこ
夕音のよとあまのよとあひのよと

らふか

河海まのあまのこあひのこ
注は是非不知トアリ

あまのこあひのこ
夕音のよとあまのよと

あまのこ

あまのこあひのこ

あまのこあひのこ

あまのこあひのこ

あまのこあひのこ
あまのこあひのこ
あまのこあひのこ
あまのこあひのこ

夕音

夕音のよと

あまのこ

あまのこあひのこ

夕音

あまのこあひのこ

あまのこあひのこ

あまのこあひのこ

あまのこあひのこ

あまのこあひのこ

あまのこあひのこ

あまのこあひのこ

中章

夕音

風の行よまほしうそなほ

風生竹長窓間月照松時其まよひ

おろきまふゆりにし 雲井居の心こ

おれ井のわもわること おれ井のわもわること

音あふきおののり おののり

秘引多回く

いし いし

花 花

をわけぬと をわけぬと

二物 二物

おめ おめ

い い

あ あ

い い

何れいあ 何れいあ

や や

り り

冠 冠

我 我

自 自

夕 夕

私 私

牙 牙

大 大

ふ ふ

引 引

い い

ま ま

祢のくちらりし

よりわつこい こそ兼文にけり名方のおゆあつし

女はよふれ路しすのこ

そまおの居の心因たはりゆけり こそをるるのこいふ

物身やうわしんやういおひる

こ家方のま人のこいんものかあしなまき言の居るは

おしこらしはけし

ケの音のよまあおの居るまふ

又ういしんりん

おくしんりんりんりんりんりんりんりん

わういしんりん

そまおの居るのこいんりん

おまおの居るのこいんりん

いんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりん

いんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりん

にんりんりん

おくいしんりん

因たは母あすいわゆまふこそまおの居るよりりんりんに

わういしんりんりん

おの言にからりゆりんとそまおの居る

そまおの居るのこいんりん

大ういしんりんりんりんりんりんりん

因たはの持物をとじまわしんりんりん

中まおの言にからりゆりんとそまおの居る

弘徳の言にからりゆりんとそまおの居る

いんりんの言にからりゆりんとそまおの居る

おまおの言にからりゆりんとそまおの居る

まおの言にからりゆりんとそまおの居る

弘徳の言にからりゆりんとそまおの居る

と福能あるりんりん

いんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりん

いんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりん

いんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりんりん

あの人くし

井田君の世所乃おれをたてておのるを御まわし
おれも人いつとさへつけられぬまの女所をまもる

にりあてあて

おのるをわきまをたてた世をわきまをわきま
おとまもゆのそれかきま

弘徳にたいとゆわきまのこころのこころ
しつりつりわきまをいふまは

まじりおれたよくたてたおのるをいふ
おのてあて

おのるをいふおのるをいふおのる
おのるをいふおのるをいふ

おのるの詞を所乃のまじりて後然る人と
いめおりて

おのるをいふおのるをいふおのる

おのるをいふおのるをいふおのる

おのるをいふおのるをいふおのる

おのるをいふおのるをいふおのる
おのるをいふおのるをいふおのる

おのるをいふおのるをいふおのる
おのるをいふおのるをいふおのる

おのるをいふおのるをいふおのる
おのるをいふおのるをいふおのる

おのるをいふおのるをいふおのる
おのるをいふおのるをいふおのる

おのるをいふおのるをいふおのる
おのるをいふおのるをいふおのる

おのるをいふおのるをいふおのる
おのるをいふおのるをいふおのる

おのるをいふおのるをいふおのる
おのるをいふおのるをいふおのる

おのるをいふおのるをいふおのる

おのるをいふ

いとわりのせきゆしき 秘奏上巻

こゝゆたはひるにありーうらたあま詞へ

ふきわたりて

おま井居乃よりうらうらわりの山まにのぬまよこ

しらりーこまわりて 秘ゆたはのぬまよこ

おまあそよあつてさすい

秘一語をいりわやあつの中にくそくけりて別あそま

つをあら詞をいけて心のこりるにあまよこ

とそりなつてくまよこ

ふくくそくけりよめり

あつてうらうらわりのこいあまよこ

しらにまろー母中うらうけ

秘あつ里いそくろよこ

くけりえ 何若

あつーとまむ 居をらあつー

あつー山うらり 白紙也

もくこ人とあまよ

秘おま井居と人とわらうら 秘大文の詞私 大文代也

あつりあつりにいれい

私ゆたのふ心のまぬあそりこれゆに別り

まろよとまろりけりーこくのまろまろいけり

あつてわらうらとまろいけりあまのあつ

人の心こまろま物あつ

これゆとあつにわらやあま乃あつ

あつていふまろよこ

秘あつりあま井居

あつゆのゆまをまろりわらうらこいまろ

あつていふわら

こい又りあまお居のゆまゆとられゆたのあつ

とあつーけりうらまのまろあつにのこりい

秘あつにまろーゆまゆまろ

あつの中こいあつゆとけりあつ物ゆら

いふいふをなすつたついでに
是よりたはぬの心におしめ
内々の心のつかへて
わせと又うれしき

人の心の中をくぐり
の書の官位をあらわす

かきつけのふりあは
の書のあらわすをくらし

ことさうちかたに
くさくさのやに
せつとむす

まよふもあはらに
たまのなをさるに

ゆ服なりたがく
あはらに

ゆたかのおき
ゆたかの心

おもひの心
さうなす

私よりいふこと
るあはら

まのついでに
おぼろ

又のついでに
うしをえ

いとお
うしをえ

おぼろ
おぼろ

おぼろ
おぼろ

おぼろ
おぼろ

秘ノ物ヲ知ス

かゝるべき也 ちまひ

みちろまゝいきいのちをこ

たまのりまみーくても常の居れりまをみらま

さすをいけけさるま

らりいれおいつらんとていつくもにらりいれん

こゝらいのりれらりにく引まねんとていれまを

いれまゝらりーこゝら

われをまらりんとりてり音とのりまらりーく

さすをいけけさるま

おとゝ君のいれれと宰相君

り音乃乳母

おろー君とこ

宰相君乃河り音を居りりままのりまらりーく

さすをいけけさるま

殿とさまよおら

父内お居にりたりん今海をいれりいれりいれり

いれりいれりいれりいれりいれり

いれりいれりいれりいれりいれり

いれりいれりいれりいれりいれり

いれりいれりいれりいれりいれり

宰相君河りり音をいれりいれりいれり

いれりいれりいれりいれりいれり

宰相君乃河り音のいれりいれりいれり

宰相君乃河り音のいれりいれりいれり

いれりいれりいれりいれりいれり

り音をいれりいれりいれりいれりいれり

いれりいれりいれりいれりいれり

いれりいれりいれりいれりいれり

り音のいれりいれりいれりいれりいれり

人のいれりいれりいれりいれりいれり

馬やうたるうり時よりあましくしるしに時にかん

あの時といふなり
あめりと 7音れ先のと事おき

大なる何れもまじりておる馬は寄を合せり
おとろあんのいとしをきえ

7音り初由をたらし
おまわりいさか

サワレ又さしれとしんありそて井日

おのこさやをよかえをえとれとまじり
をとりそしあまありりる

け程たいりんもあつたりつる物をとあや
まあせしん何れめ 秋 音井馬道

又7音りあまふ道
そしあつたお 音お馬乃ゆ

おとろあまのりあまうり 由より退かある

くまきれし對面しゆり火をとりすここのあり
し 内をたし林の中より退か

りやあまのりさけし 音破長根

内府の退かにおりてこころゆり
いとあまのりとおりてまおさ行

おと井馬の内をたしあつてこころゆりあまゆり
あまのりあまのりあまゆり

見たり音の心こころあまゆり
こころあまゆりあまゆり

7音れあまゆりあまゆり
あまゆりあまゆり

おのこさやをよかえをえとれとまじり
おとろあんのいとしをきえ

け程たいりんもあつたりつる物をとあや
まあせしん何れめ

そなたのちねとのいさよ
殿のちねのいさよ

田代のいさよをいぬ他又柳家太師又
実母をいぬといふこと
先づいさよのいさよのいさよ

三條のいさよと冠者をしていさよ
といさよのいさよと冠者といさよ
いさよをいさよのいさよ

いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ

いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ

いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ

いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ

いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ

いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ

いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ

いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ

いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ

いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ
いさよをいさよのいさよ

このはまのうらまひ

人あまたんしん ちまひけりし ことりれどとわらふ

いそおとしなりし 学問しりあちあひ

わのやと人やりたし

人やりのたあまくに ちまひのこししとていふこと

舞ふりうやひまらふ ぬしの元をこしりし ちまひ

糸氣おしりく ことりあふ

たけまこしり ことりあふ

河のまのせりし ことりあふ

又受領分 國守とる人 ことりあふ

武山給 玉節 受領の者 作付 ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

いりしきき ことりあふ

おんりの院 ことりあふ

まじりのあの人 ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ ことりあふ

ことりあふ

ことりあふ

ことりあふ

ことりあふ

ことりあふ

ことりあふ

ことりあふ

ことりあふ

ことりあふ

ことりあふ

ことりあふ

ことりあふ

善相公異見内 一請減五節妓貞亨

右臣伏見朝家五節舞妓者大嘗會時五人即皆預叙位其後年々新嘗會時四人云預叙位之例由是至大嘗會時權貴之家競進其女以充此妓尋常之年人皆辭道可闕神事一實有新制令諸公及女御轉轉進之其費甚多不能堪任伏案故實弘仁兼和二代在好内電故遍令諸家擇進此妓即以爲選納之便也諸家悅天長不願糜費其財破產以貢進方今聖朝修其惟薄之其陪因此亦妓女舞畢歸家之預燕寢然則此妓數人遂有何用重案日記昔者神女來舞未必有定數四五人伏望擇良家女子未嫁者二人置為五節妓其時暇月料稍令饒給節日衣裳亦給云物若貞節不嫁經十年者即預叙位時令出嫁若願留侍者預之藏人之別即擇其替人亦如前年寬平遺誡曰每年五節無人進出迫彼期日經營云云今貞公卿之中令貞二人雖非其子必令求貞殿上一人選合之

當代女沖又貞一人公卿女沖 依次貞之終而復始以為常更須入十月節召作若身在在前令用意

梅察大納言

左大臣

云云升 乃乃ま又りり
葵とれ足やんはるふ

人のみせらるはしきよとわあものつこ

右の分二人受領分二人受領分いふりわらりてい

同殿上人乃まのりすりていへの五節といふと向ありて

分一助殿上人の事すりてい大回もとのい

五節ハ恒々年いふ二人受領二人受領や代始に公卿

二人受領と受領三人五節や其受領分いふと二人受領
うスレハ上ノ五節ト云く五節舞妓に人事善相公竟
云新嘗會時四人云今年依お新嘗會若四人云二人
若梅察大納言左衛門督やい受領者長清惟光
やい四人

和名より「きさ」といふを「ちり」に申辨するを「けり」の
平字をいつた申辨に「友近」に「兼」を「れ」に申
弁し「り」を「ちり」に「けり」といふを「り」を「れ」に「り」
に「交順」を「た」に「れ」を「り」に「けり」に「り」を「れ」
に「り」を「れ」に「り」を「れ」に「り」を「れ」に「り」を「れ」
に「り」を「れ」に「り」を「れ」に「り」を「れ」に「り」を「れ」

秘同何よみとあり
同みぬとのりより制のりわ
一勅をよむはと
に方

をのくむすを

當年の人の舞妓を人々の女
とのりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて
むをりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて
同惟先女の舞妓のりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて
一勅これの舞妓のりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて
ついでに

惟えり心や 速書す

大納言のりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

按家大納言のりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

あうんのりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

惟えり心や 速書す

按家大納言のりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

あうんのりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

大納言のりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

惟えり心や 速書す

按家大納言のりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

あうんのりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

あうんのりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

あうんのりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

あうんのりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

あうんのりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

あうんのりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

あうんのりめられこれの舞妓入つてのりめられこれの舞妓入つて

加職事六位職事 着紫色也

西宮抄云指貫王者等衆人所用也古時有制位下不用
近代六位以上昇殿六位皆用之也

六位紫色也 又ゆくとてくつに司のともり 只直衣の

ころや 一様御院也

或夕方六位より直衣をゆてる事お殿のきりうりて

はまよりゆりぬゆきされてとりあまのふれきぬま

こしよりゆりぬゆきとてゆきぬし又御院お節も

六位も直衣とゆきゆきゆきとてゆきぬしゆきゆき

五節日直衣とゆき余物宇治左府記仁平元年

十一月十七日夕七時今夕あまのきりぬゆきゆきゆき

之 宣旨束着赤入似云面目仍不赤内きおま

おまゆり上直衣とゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ぼび者のゆきやかきす辰の目まはされいさらし
 後ゆくゆきまきむらやまのこころい
 辰日ひらのしるしありてはけりありさるる也
 青柳の葉とてまきく蠟ろうの唐車からぐるまの文ぶんを
 蛸たこを擲なけられいし又節ふしより折こげられけり
 くのしるしありて用もちてい
 こすけいしるしありて 雲うみのこころい
 人のしるしありて
 り者の目まはすゆきのまきまきり
 けいしるしありて
 けいしるしありて 又雲うみあり
 ていしるしありてはけりありてまきまきり
 子ぬるまきりまきりまきりまきりまきり
 まきりまきりまきりまきりまきり

ちよりのしるしありてはけりありてまきまきり
 又節ふしより折こげられいし又節ふしより折こげられいし
 又節ふしより折こげられいし又節ふしより折こげられいし
 又節ふしより折こげられいし又節ふしより折こげられいし
 又節ふしより折こげられいし又節ふしより折こげられいし
 又節ふしより折こげられいし又節ふしより折こげられいし
 又節ふしより折こげられいし又節ふしより折こげられいし
 又節ふしより折こげられいし又節ふしより折こげられいし
 又節ふしより折こげられいし又節ふしより折こげられいし

ける妙たまに 昇ありて 衣きを着きて 宿しゆくを ぬりて
 おおきき物ものの何なにに 於おけりて 宿しゆくありて 宿しゆくありて
 於おけりて 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて
 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて
 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて
 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて
 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて
 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて
 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて
 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて
 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて 宿しゆくありて

- 七瀬しづな前まへ
- 新あらた波なみ 景かげ太た 河かは俣は 薩さつ大だい鳴なり 橋はし小こ鳴なり 家いえ
- 佐さ々さ奈な谷や 幸さい崎さき 山やま
- 大だい海かい中ちゆう七しち瀬ぜ前まへ
- 河か合あ原はら 土つち御み門かど 中ちゆう御み門かど 大だい炊ひ御み門かど

(二葉)

應和三年七月廿一日御記曰藏人守下西女名系雅村
供御後物以明日令天文博士保雲去茲維波湖及
七瀬三元河原禰
松
なすきすまらさけりいづらひとて細い神のひびきやせはる
同集そ仔細言河野留波まきさくくたひますあつめなり
屯よ中林の侍り来るよ母のふかいらるるやうく
都こぬらるるあつめきさけくさるの花を海にりりら
大納言しつとけらるる

右馬の書秘のされ人よあぬと

秘宮子秘のあつはらるる

秘宇多御門秘の古創あり

秘それしつとけらるる

秘あつめのもあつらるる

ほのかにさしつとけらるる

近きあつめ侍りあつらるる

はなははいづらるる

源の庄に曲侍り執奏ありとる

あつめ秘の音

うららかにあつめあつらるる

しつとけらるる

あつめのあつめあつらるる

あつめのあつめ

あつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめ

あつめあつめあつめ

あつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめ

あつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめ

あつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめ

あつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめ

あつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめ

あつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめあつめ

海つりよ 秘 海つり

古人天よもろくし今も海つり 日暮に 今のははは

よありそれを略し 秘 日暮に

いつてはははは 秘 日暮に

はははははははは

はははははははは

はははははははは

秘 海つりよ

はははははははは

はははははははは

秘 海つりよ

はははははははは

はははははははは

はははは

秘 海つりよ

はははははははは

ふりみりに 秘 海つりよ

ちいぬ 秘 海つりよ

はははははははは

はははははははは

はははははははは

はははははははは

はははははははは

はははははははは

はははははははは

はははははははは

はははははははは

はははははははは

はははははははは

はははははははは

はははははははは

はははははははは

昇 世をほろびのちよこ

秘 後の世をいふは 但し吾をいふは然

秘 後の世をいふは 然

ありの入りはあり

世をいふはあり

いふはあり

秘 ありの入りはあり

秘 ありの入りはあり

ありの入りはあり

ありの入りはあり

ありの入りはあり

ありの入りはあり

ありの入りはあり

ありの入りはあり

ありの入りはあり

ありの入りはあり

There are many things in the world that are not as they seem. The things that we see are often just a shadow of the truth. We must look deeper to understand the real nature of things. The things that we see are often just a shadow of the truth. We must look deeper to understand the real nature of things. The things that we see are often just a shadow of the truth. We must look deeper to understand the real nature of things.

Handwritten text in cursive script, likely a list or account. The text is written in a fluid, connected style. It begins with a large initial letter, possibly 'A' or 'B', followed by several lines of text. There are some small annotations or corrections in the margins, including the word 'secret' written vertically. The text appears to be a list of items or a record of transactions, with some lines starting with 'A' and others with 'B'. The handwriting is consistent throughout the page.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or account from the previous page. The text is written in a fluid, connected style. It begins with a large initial letter, possibly 'C' or 'D', followed by several lines of text. There are some small annotations or corrections in the margins, including the word 'secret' written vertically. The text appears to be a list of items or a record of transactions, with some lines starting with 'C' and others with 'D'. The handwriting is consistent throughout the page.

リ音のいしむるよし

おやいまいこち 秘 養老

うまいこち

リ音のいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし

あまのいしむるよし

あまのいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし 秘 養老のいしむるよし

あまのいしむるよし

あまのいしむるよし

あまのいしむるよし

あまのいしむるよし

あまのいしむるよし

あまのいしむるよし

あまのいしむるよし

あまのいしむるよし

政大長同就准三官覽之者也

准后事太皇太后宮皇太后宮皇后宮此三ノシテ

准三后ト云官
執政准三后例

忠仁貞觀十二年四月十日為准三官

照宣公元慶六年二月一日准三官一如故事

仁和元年二月九日曼
賜之儀前國傳不受
同九年正月廿日

貞信天慶二年二月一日准三官一如貞觀故事

辞不賜忠義公貞元二年三月四日准三官

東三條因白兼家之寛和二年六月廿二日相改蒙准宣

忠仁之例良房の如くの例もあつたといふ事其

例を用ゝる事あり良房之例の事ハ可見くはる

と云ふ事あり是れ也

或あつたと白馬と書きたる事あり白馬といひてあつた

白馬物といふ事あり七日節會といふ事馬節會とい

ふ礼記文といふ事あり

まらふの日はのちのちと云ふ事あり

内乃儀事と云ふ事あり

あつた儀事と云ふ事あり

あつた儀事と云ふ事あり

二月廿六日朱在院あり事あり

御託云延喜十八年二月廿六日己是日各入六条院と

云月被例の儀天曆二年三月九日康保二年十月

廿三日女度例あり

非父子之時行幸上皇宮例

天長十一年二月廿一日仁明天皇幸淳和院 見國史

天慶十年正月四日村上天皇幸朱雀院但如所同

皆謁太后于柏殿 見孝子主記

山院御宇文永八年正月行幸深草院所長講

堂之時有沙汰為中門下所如朝觀行幸延天長

六例

秘 仙洞への行幸は毎年朝觀のむきとあり、父子
祈時の事、これ兄弟才多し、御まをぬ、ふりては、御
所書に、まををい、ゆの、み、ま、り、て、な、の、所、を、い、
と、ま、り、出、る、冷、泉、院、に、朱、符、院、の、法、僧、子、と、ま、り、
書、仙、洞、の、行、幸、中、古、より、車、の、の、ま、り、を、い、
九、の、所、忌、月、 異、日、同、く、所、を、い、忌、月、昔、の、ま、り、て、
或、市、ま、り、と、ら、と、あ、り、と、唐、の、忌、月、タ、テ、忌、日、有、
日本、の、忌、月、忌、日、共、ア、也、 國、忌、月、又、ハ、キ、ン、ワ、ツ、ト、
人、の、ま、り、を、い、ま、り、と、ら、と、あ、り、と、唐、の、忌、月、タ、テ、忌、日、有、
保元内宴日有沙汰性寺岡白被着赤色袍之由見和
威能橋下龍衣市 面、普、通、也、裏、ハ、櫻、也、八、幡、院、時、
主、上、令、着、保、下、龍、衣、 同、半、臂、給、或、又、晴、ノ、行、幸、ハ、春、
公、御、着、棒、檣、或、前、木、下、龍、衣、保、元、來、
晴、儀、諸、君、着、麴、麩、袍、一、日、之、當、色、也、其、時、主、上、令、着、
赤、色、御、袍、給、又、才、一、人、同、く、

漢代曆曰大唐景雲三年 壬子 寅月 晉内外武官各加階
及天下老人与极授官年九十已上老与緋袍牙笏
西宮記云内宴之日臣下皆麴麩主上服赤色而才
上御服同色之袍是又例也有雜例之中故貞信並
小野宮大臣度々着赤色但延喜之間國經大納言時
着赤色之クワウロセント云地赤中文黑袍
内宴日主上并才一之着赤色又殿上賭弓時如此見
西宮抄青色之袍の下龍衣ハ檣ノ子或信榮と異同也
秘 ありて、い、ま、り、と、ら、と、あ、り、と、唐、の、忌、月、タ、テ、忌、日、有、
昇 一、點、ま、り、を、い、ま、り、と、ら、と、あ、り、と、唐、の、忌、月、タ、テ、忌、日、有、
赤、色、の、ま、り、を、い、ま、り、と、ら、と、あ、り、と、唐、の、忌、月、タ、テ、忌、日、有、
此、所、と、い、う、の、ま、り、を、い、ま、り、と、ら、と、あ、り、と、唐、の、忌、月、タ、テ、忌、日、有、
い、ま、り、を、い、ま、り、と、ら、と、あ、り、と、唐、の、忌、月、タ、テ、忌、日、有、
尺、一、寸、五、分、同、く、也、
秘 院、の、ま、り、を、い、ま、り、と、ら、と、あ、り、と、唐、の、忌、月、タ、テ、忌、日、有、
朱、符、院、

ふほめさるるものなり

にふそのりよとれ文人 秘再同

秘 さうごうの作文をいふなり

そのれもいふやまこころ ガクシウシラシ 學生十人とのめ

秘 學生といふ及才をいふ人なり

一勅文人儒者に學生といふ日及才をいふ人なりとの

いふことなり

亦これつらうなるをいふをいふていふはたのめ

表のいふことなり いふことなり

秘 延長四年七月九日勅記曰七月廿三日式部省奏省試判

文其判及才者三人登省記曰康保二年十月廿三日

行幸朱雀院御題お秀人所被行

花葉共舟輕 勅七言 澄凌氷典膺及才人一人

橋停平 字橋宣 玉彈守是輔子 藤原雅村獻策 秘

村と御間也 是亦其例也

秘 勅題といふことなり

秘 御事試み勅題と云ふは延長應和康保の例なり

又堀川院寛治四年多羽殿行幸に被下勅題

有進士試

秘 大政のいふことなり

秘 かくいふ物なり 秘 臆病をいふ

秘 水原抄におくことなり 秘 字向いふことなり

ることもいふことなり 秘 奥言いふことなり

いふことなり 秘 勅文

今案臆病甚若ん言慢るいふことなり

いふことなり 秘 奥言いふことなり

いふことなり 秘 奥言いふことなり

秘 放鴻の試み試るといふ商量をいふことなり

いふことなり

秘 放鴻乃作又とて中鴻の人よりいふことなり

作すことなり 秘 法合ることなり

唐朝といふ進士をいふことなり 秘 勅文

て又とかせゆら也

何 放鴻試市也

朱権院試ニ學生皆ある矣中略述て病を修る
や文章生試ニ或る有るは試之有人試ともいふる也
今日朱権院よりく被りし也

ふふの如く之を思ふは試の意ありてはふふの
らねくはてりたり也 乃ちしは進士にあらざれば
方略の意旨をらね

ワラララララララ

無事とらりてはふふの如くは物をもめらる也

春学時まつり

院の予とて又いりりあり

院に之りといふはつふのみし

秘 院多しは院のみとて相重とてふふの如く朱権院

再 院の予とて又いりりあり

院の予とて又いりりあり

そのふふありてはふふ

朱権よりやに依りてはふふ

と依りてはふふ

院の予とて又いりりあり

院の予とて又いりりあり

と目れ朱学時まつり

院の予とて又いりりあり

院の予とて又いりりあり

院の予とて又いりりあり

院の予とて又いりりあり

院の予とて又いりりあり

院の予とて又いりりあり

院の予とて又いりりあり

いよりの人に在りて 一人へし 吟

いよりの人吹つてくる笛舟に在りて なるは 吟
弄世を流るる舟に在りて なるは 吟
秘 唐書より 礼樂を 吟
あやうま 秘 経云るのまじりて
とておほひて

こゝろを 吟
うしろの昔を 吟

御書 秘 経代の何れに 吟

わし 吟

花 ことろ 吟
これ 吟

をい 吟
あこの人 吟
るあ 吟
あま 吟

が 吟
つ 吟

ま 吟
李王 吟

上皇 吟
長 吟

は 吟
安若 吟

あ 吟
あ 吟

あ 吟
あ 吟

あ 吟
あ 吟

あ 吟
あ 吟

あ 吟
あ 吟

人、あつたむせの事

私河内郡平野邑の人政とあり
相梁殿在牙崔院良角東宮故宣之彼宮有素相房
床也之此故れ相殿為段宮法在(此)由見九條右中相記
相殿漢武帝の相梁殿(づ)と(る)や天慶十年二月
朱崔院行幸謂太后于相殿之由見書了王記

かゝるむらゝむ

まじと記持ありといひけむ

太后の行幸を伝ふ所也

はるるあつたむせ

古きものなるべし

こゝの事いふ所ありとありけむ

かゝるむらゝむ

こゝの事いふ所に年十一年ありとありけむ

物といはるる事ありとありけむ

いふはこゝの事いふ所に^秘 后の御

よまの御事あり

ひらの事いふ所にありけむ

若れ事いふ所にありけむ

はるるむらゝむ

^秘 相殿太政大臣相臺の帝あり

みゝもはるるむらゝむ

^秘 只これ一つの事ありとありけむ

后の御事あり

太后の御事ありけむ

の事をありけむ

世をありけむ

因こと今の事ありとありけむ

由侍の事ありけむ

かゝるむらゝむ

ほの事ありけむ

いよしれとるまはなり 秘 くれより皆そのよし

后めりやけよそせむをわらふあり付はしむらりの心
ついでにちりまにさぬあまのふしむいふよるのあけそ

所まつきつら年官年爵のよし 秘 やのよしはさ
るるあけ命をさしむらひり 秘 高きあけはさむらひ

なりとありしむらひ 秘 高きあけはさむらひ
せしむらひ 秘 高きあけはさむらひ

は御給年官年爵也

おいしむらひ 秘 高きあけはさむらひ
秘 若しむらひ 秘 高きあけはさむらひ

院しむらひ 秘 高きあけはさむらひ

平河松風春もあり人の材極とらり 秘 高きあけはさむらひ
ぬ何しむらひ 秘 高きあけはさむらひ

大りの若その日 秘 高きあけはさむらひ
とつむらひ 秘 高きあけはさむらひ

とつむらひ 秘 高きあけはさむらひ

秘 作又の流し 秘 高きあけはさむらひ

秘 撰入 秘 高きあけはさむらひ

若のあけ 秘 高きあけはさむらひ

一期 秘 高きあけはさむらひ

礼記曰大樂正論 秘 高きあけはさむらひ

同進士 秘 高きあけはさむらひ

聖武天皇 秘 高きあけはさむらひ

進士及牙別 秘 高きあけはさむらひ

兼和六年春五皇若連珠詩 秘 高きあけはさむらひ

孫王茂世王 秘 高きあけはさむらひ

登科記云式 秘 高きあけはさむらひ

延喜十六年八月廿八日 秘 高きあけはさむらひ

詩 秘 高きあけはさむらひ

大江維時 秘 高きあけはさむらひ

已上四人不作用句及牙

くく三人あん 秘 夕暮けち

秋のつらみ 秘 夕暮けち

正躬王 葛野親王男 弘仁七年補文章生天長五年正月二日侍從

源清平 具忠親王男 延長二年正月文章生七年九月廿日侍從

源保光 代明親王男 天曆四年正月廿日奉文章生計同五年

遂乃才十年正月一日侍從 天曆四年正月廿日侍從 同延長保光例之

け秋の宮宿陰目より夕暮けち

あの人代

秘 市井屋のあし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

大政 秘 内大臣

ほ六条院 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

秘

中文のあし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

あし 秘 内大臣

又或アノ家の事ハ此賀ニ付忌上ノ用ニシテ
新賀ノ事 一節賀儀先規不同ハ是年ニ業所
奉命ノ禮ハ借養女ノ事アリ

并 此ノ事ハ此ノ事ニ付
并 此ノ事ハ此ノ事ニ付

此ノ事ハ此ノ事ニ付
此ノ事ハ此ノ事ニ付

此ノ事ハ此ノ事ニ付
此ノ事ハ此ノ事ニ付

三代實録ヲ四元慶二年九月廿五日丁巳天皇延席
御賀ノ事 年賀ノ事

碩學高僧五十人於清和院大設存會誦法記經
限三日訖太皇太后今年始滿五十五帑由是慶賀修
善祈禱餘齡親王公卿文武百官畢會
并 此ノ事ハ此ノ事ニ付

此ノ事ハ此ノ事ニ付
此ノ事ハ此ノ事ニ付

此ノ事ハ此ノ事ニ付
此ノ事ハ此ノ事ニ付

此ノ事ハ此ノ事ニ付
此ノ事ハ此ノ事ニ付

或本に岩の根をけりてさみめし市河の御目よきなる
拾遺之え良親王の香殿のうらまはりおのしめし
はるはるの御目よきなる御目よきなる御目よきなる
御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

大の御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

伊平の御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

かくとわあ(い)

業のいふそとむらじり中(い)の御目よきなる

中(い)の御目よきなる御目よきなる御目よきなる

御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

胡蝶巻の序(い)の御目よきなる御目よきなる

御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

御目よきなる御目よきなる御目よきなる御目よきなる

Handwritten text in a cursive script, oriented vertically on the right page of the open book. The text is difficult to decipher due to the cursive style and the image's resolution, but it appears to be a single line of writing.



